

1 派遣期日 令和5年11月11日（土）

2 派遣先 学校名（会場名） 信州大学教育学部附属松本学校園
所在地 長野県松本市桐1丁目3番1号
<http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/fuzoku/matsu-sho/>

3 研修内容

11月11日、信州大学教育学部附属松本学校園の「2023年度幼小中公開研究会」に参加させていただいた。

信州大学教育学部附属松本学校園では、文部科学省から研究開発学校の指定を受け、『未来を拓く学校づくり～「たくましく心豊かな地球市民」を育む12年間の幼小中一貫教育のすがた～』を研究テーマとしている。今年度はその最終年度である。心豊かで国際的で地球的な視野をもち、かけがえのない生命と地球を守り、社会や人間の幸福に尽くすることができる人間を「たくましく心豊かな地球市民」と定義している。この「たくましく心豊かな地球市民」としての育ちを目指し、幼小中で共通の研究テーマ「未来を拓く学校づくり」を設定した。この具現のために、幼小中12年間の育ちを支えていくための教育課程「学びの総合化」を編成し、発達段階に応じて、4つの段階を設けている。今回は、その中から3つの段階を参観させていただいた。

（1）【遊び】（3～5歳児：幼稚園）

『遊びにうちこむ子どもに寄り添う教師のあり様～その子の「やりたい」と対象との関わりの中で見られる育ちに目を向けて～』をテーマに、保育案を作成している。年少では、「友だちと同じ遊びを楽しむ」こと、年中では「やりたい遊びを友だちと共有しながら遊ぶ」こと、年長では「遊びのイメージを共有した友だちの気持ちを考え、遊びの中で思い付いたことを折り合いをつけたたり付け足したりしながら遊ぶ」こと、と発達段階に応じて遊びのねらいを設定していた。遊び場も園児の「やりたい」に合わせていた。その中でも、年長の大工さん遊びでは、かなづちで釘を打ち付けたり、のこぎりで木材を切っていたりしながら家を建てていた。参観者からすると大人（保育者）と一緒にやらないと危険ではないかと不安視していたが、園児同士で声をかけ合い、板を押さえるなど安全に行おうとしていた。保育者は、アドバイザーに徹しており、いわゆる「ごっこ遊び」ではなく、その中には一人一人の園児の「やりたい」を実現するために何が必要なのかを熟知しているからこそできるのであると感じた。

（2）【遊びの領域化】（小学校低学年）

小学校の研究テーマは『「この子だからこそ」を支える指導・支援』である。小学校低学年には教科の設定はなく、「かがく」「ことば」「くらし」「ひょうげん」の4つの領域から教育課程を編成していた。小学2年の「ひょうげん」領域では、「水族館」という曲を聴き、音楽を形づくっている要素の変化に着目したり身体を動かしたりしながら、聴き取ったことや感じ取ったこととを関連させて、曲のイメージを想像するという学習を行っていた。指導案に書かれている抽出児の様子を観察していたら、曲名を知らないうちは、聴き取ったイメージ（暗い感じ、妖怪が出てきそう、など）を活発に話していたが、曲名を知った後は、聴こえてくる楽器の音色などに着目し、活発に意見を発表していた。

次に、小学2年の「かがく」領域を参観させていただいた。学級花壇に植えるパンジーの苗の植え方について考えるという学習内容であった。事前にパンジーの花が成長したときに使用する花壇の面積に画用紙を切って作成し、イメージをもたせていた。実際に学級花壇が教室の外にあるので、児童たちは思い付いたら花壇の面積をすぐに測定に行けたり、一列に必要な苗の数をかけ算を使って求めていたりしていた。算数の学習内容を自分たちの学校生活と関連付けて学ぶことで、学ぶ必要性がごく自然に身につくのだと感じた。

(3) 【領域の教科化】（小学校高学年）

小学4年の「総合的な学習の時間」では、学級で飼っている羊が安心して学校で暮らすことができるように、児童一人一人が自分でできることを考えて実践していくという学習内容であった。授業を参観させていただいていると、羊が寒くならないようにと羊小屋の柵に毛布を掛けていたり、新鮮な餌を食べてもらいたいと牧草を補給していたり、羊が板のささくれでけがをしないようにと、柵を補修していたりと活動はばらばらであった。だが、「羊が安心して学校で暮らす」という目標を念頭に置いての活動であり、そこには生命の尊重や、誰もが住みやすい環境という福祉の観点からのアプローチであったと感じた。

小学6年の「技術」では、兄弟学級の1年生のペアの児童が笑顔になれるプログラムをタブレットで作成するという内容であった。まずScratchを使用して、1人でプログラミングをしながら、プロジェクトを作っていくという技術が6年生でも可能であることに驚いた。また、前時までに改善できそうなところをジャムボードに書き出しており、それを一人一人マトリックスで整理していた。そして学習の最後には、スプレッドシートに書き込んでいた。参観を通して、まさに一人一端末時代の理想的な活用方法を見せられた気がした。

【教科等の総合化】（中学校）は時間の都合上、参観できなかった。

午後からの授業研究会では、上記の小学6年の「技術」部会に参加させていただいた。研究協議では、同じグループの先生と日頃の端末の活用方法や苦労話などを共有させていただいた。偶然授業者の先生に話を聞ける機会があり、児童の端末活用技術を向上させるために、教師側も積極的に附属学校全体で研修を行っているのはもちろんであるが、児童側にも4年生の頃から「プログラミング係」という係を作って活動を行わせ、係が日常的にScratchのスタジオ内にプログラミングをアップしているという。そこで意図的に児童同士で共有・参照できる環境を作成していた。そして単発的に終わらせるのではなく、今後中学校でも小学校までで培った技術を生かし、一人一人の興味関心、活用能力などを考慮しながら活用能力を発展させていけるようにするのが課題であるということであった。

4 感想

今回参観させていただいた信州大学教育学部附属松本学校園は、幼稚園、小学校、中学校が隣接しており、そこに通う子どもも12年間ほぼ変わらないのであるから、じっくりと子どもを育成できる環境に恵まれているという附属ならではの強みがあると思った。当日配付された座席表には、どの授業にも抽出児だけではなく、学級全員の思いやめあてが記載されていた。このような座席表が作成できる背景には、おそらく幼稚園入園から一人一人の個別の支援計画のようなものが作成されているのかと推測できた。このような計画があると、幼小中連携もスムーズにいくのではないかと感じた。今後「学びの総合化」の教育課程の中で育った子どもたちが、高校生となり、社会人となりどのように成長しているのか興味がある。

残念ながら、予定されていた講演会の福井大学の松木先生の講演会は、体調不良のため、動画配信となってしまった。動画の中で「教育は知識や技能の習得だけがねらいではない、教師は子どもと授業をしているとき子どもから学ぶことを楽しんでいる。子どもから学ぶことを楽しんでいるから、子どもが学ぶことができる。」という言葉が印象的であった。参観させていただいた授業の先生方はみんな上記のような関係が構築できていた。それは、子どもにとっても安心して学べるのではないかと考えた。

今回、先進校等調査派遣視察という機会を通して、自分自身も新しい視点を見つけることができた。本校の子供たちが学ぶことを楽しめるように、これからも日々精進していきたい。